

熊本学園大学 第20期水俣学講義 2021年10月14日

わた史の中のミナマタ 柳田耕一(71歳 水俣病センター相思社・初代世話人)

◇ミナマタとの関わり

出会い：1969年・熊本の高校を卒業し、半年後上京。新聞配達しながら受験勉強。

1971年・春 東京農業大学入学。最初の年は読書と映画とバイトで明け暮れる。
翌年映画「水俣病患者さんとその世界」が完成・学内での上映運動にかかわる。
水俣病そのものよりも、それにかかわる人への関心が契機となって関わり始める。
水俣病センター創立運動（東京事務局）にボランティアとしてかかわる。大学を退学。
1973年・秋 水俣へ移り住む。翌年、相思社設立とともに世話人に。

水俣で：未認定発掘運動（公認されざる水俣病・最も苦しいのは差別という真実）

伝える場作り（水俣実践学校・教育合宿 ⇒ 水俣生活学校・歴史考証館）
写真集・資料集の編集と発行 映画「水俣甘夏」制作

財団（相思社）運営：運営資金作り・組織の維持・支援活動との両輪運動

家族の形成：結婚・こども 団地での生活

挫折経験：①政治組織への参加 警察権力への介入の口実となる。

②水俣大学設立運動 町起こし運動（地域との融合）の思いが空となる。

③甘夏事件 多くの患者・支援者の信頼を裏切る結果となり、相思社を退職。

退職仲間と資金を出し合い有限会社「ガイアみなまた」を結成

途中で単身上京 7年 水俣大学設立運動+大石会長から請われ環境 NGO 事務局
長に。地球環境問題が激化し、それに対応する様々なNGO活動に参加

環境NGOへの参加

1988年 初めて出国 ドイツを皮切りにタンザニア・

熊本学園大学 第 20 期水俣学講義 柳田耕一（水俣病センター相思社・初代世話人）

自己紹介：1950 年 9 月熊本市生まれ 熊本農業高校卒 東京農業大学中退

著書：『水俣そしてチェルノブイリ』『アメリカ中毒症候群』共著多数

<概略>

10 代の終わり 高校卒業後半年は自宅で農業に従事した後、上京 翌年・大学入学

20 代 大学生活に満足できず読書と映画鑑賞とバイトに熱中していた頃、水俣と出会う。

患者支援運動に参加 水俣訪問・株主総会・東京自主交渉・チッソ本社前座り込みや
関連記録映画製作に参加したあと、相思社設立運動にボランティアとして参加⇒大学中退
水俣への移住 相思社の初期運営に携わる 未認定発掘運動への参加

水俣を伝える様々な活動を企画運営 水俣実践学校・写真集原資料集の編集発行
教育寄宿・水俣病歴史考証館・水俣生活学校 出前授業（事実と意味で 2 時間）

30 代 「水俣大学」の創立を提起し、設立運動にかかわる。水俣病をテーマにした著書や共
著を編集・出版する一方、1987 年には、初めて外国(ドイツ)を訪問し、欧米の環境市
民運動に触れる。創立運動の最後は政治的、経済的に行き詰まり会が解散する。運動
のオルタナティブを準備中に水俣現地で甘夏事件が発生し、運動は挫折。相思社を仲
間とともに退職。その後、その仲間とともにガイア水俣を設立。

40 代 ガイアみなまた時代に地元の NPO(地球緑化の会)にコミットし、やがて代表に。

数年後、請われて単身上京し、大手環境 NGO の事務局長（会長は大石武一・初代環
境庁長官）。アフリカとの関わり始まる。主にタンザニア、中国へ。一方で環境本の
編集・発行にかかわる「地球と生きる 55 の方法」1990 年 ほんの木社。1992 年フ
ィリップピンで開催された OECD アジア環境開発会議で日本の NGO 代表として参加。
水俣病が終わっていないことをアピール。1996 年第 1 回国連地球温暖化会議(ジュネ
ーブ)にも参加。環境問題とは、政治問題であることを痛感。それを機に「AGENDA
FOR CHAGE・日本語班」を翻訳出版。企業相手の環境セミナーを開催。

46 歳で一旦、水俣に戻り、再び神戸に。大手学習塾の役員をしながら NGO 活動
(主にアジアのマングローブ再生プロジェクト)を継続。環境教育にも取り組む。

50 代 モンゴルとの関わりが始まり、モンゴルでの植林及び教育支援を中心に 33 回訪問。

56 歳の時、父親が亡くなったのを契機に 36 年振りに生家に戻る。2000 年に林野庁
との間で国有林 10ha（吉無田高原）の再植林を契約し、着手。本格的に地元で活動
スタート。一方で、生家の近くの里山の荒廃に気づき、ここの再生活動にも取り組む

60 代 自治会の役員となり、以後、自治会活動と里山復活に住民とともに取り組む。

2016 年・熊本地震で公民館が半壊。隣の自治会との共有物であったため、独立の公
民館新築を提案し、難産の末に、住民合意を取り付け、今年の 9 月から工事スター
ト。

長年にわたってコーディネートしてきたモンゴル水俣病展(2018 年)が初の本格的海

外展として開かれる。主催はモンゴルの環境行政機関。公的施設で3ヶ月間開催。
わた史の中のミナマタ 「第20期水俣学講義」 2021年10月14日

副題：私のミナマタ経験を通して若い人に伝えたい大事なこと

- 映画「水俣・患者さんとその世界」を初めて見た会場で「苦海浄土」を買い求め、その日の夜に読み終わって感じたこと。(読みだしたら止まらず、一気に最後まで)。熊本の農村・農業村の戦後 現代化の裏側でおきた悲劇 他の生き物との交感感覚
・・・何だこれは、わが村、わが家の事(歴史)ではないか！・・・
- 東京で(支援運動の波の中で)感じたこと
本音で真剣にぶつかりあう現状分析や戦術の討論。職業、学歴、地域、年齢超えて、だれもが自由に意見を述べ、述べた意見には責任が伴う緊張感あふれる「場」が眼前にあった。発言する以上は、他者を納得させる明快な論理と情理が問われ、口にしたからには責任をもって実行しないと自分自身も壊れそうだと、思えるほどの「場の力」を感じたし、それを担保しているには、患者のおかれている現実があった。その時、思ったこと
・・・・・・・・こっちこそ、本当の「大学」ではないのか？・・・・・・・・
- 患者の言葉には、長くてつらい経験から紬だされた真実があった。
 - ・ 農なら、日本の大学はぶつつぶすな。親のご機嫌取りに期末試験を受けて単位とって卒業したところで、日本の公害はなくなりません。むしろ酷くなるとたい。
 - ・ **被害があつて被害があるとじゃなか。運動があつて被害があるとばい。**水俣病でん菓でん被害があれば、支援者やマスコミが助けに来るわけじゃなか、自ら声をあげてつぶされてもつぶされても諦めんで続けていくうちに、誰かが気づくとたい。
 - ・ あっちの世にいつて、二親に合わせる顔のなかでしょうが (訴訟派、浜本フミヨさん)
- 水俣現地に住みついて分かったこと(公認されざる水俣病・症状、苦悩、矛盾、構図)
現地・現場・当事者との交流の中でしか、聞けない、見えてこない実像がある。
味噌汁の味が濃くて妻の首をしめた話。生活雑貨の中で一番の買い物はトレペ。
私はここでよか、明水園には入りたくない。
- ▲ チッソ労働者・鬼塚巖さんが、永年収集・記録・整理していた多くのチッソの文章や製品、パンフレットを屋根裏部屋(資料保存室)で見せられた時、私の中にわだかまっていた感覚が天井から降りてきて、言葉となり文字となって現れてきた。化学肥料、マッチ、ゴムホース、レントゲンフィルム、電化製品被覆コード、ビニール製品。
つまり私たちがチッソを求め、支えてきたということか? 「チッソ型社会」

- 水俣病のことなら大学で学びました、私たちの関心はそこではなく、水俣病から現代の問題点をくみ取った同世代の日本の若者が、現地で何を考え、何をしようとしているなんです。そのことを聞き取り、メキシコに持ち帰りたいと思いやってきました。昼間は皆さんのお手伝いをしますから、夕食の後で少し話を聞かせて下さい。

・・・・・・・・メキシコから馬肉運搬船の船底にのってやって来た大学生・・・・・・・・

- 最も大事な概念（生きるための種）は「共生同苦」共生だけなら〇〇でも口にする。水俣時代に耳にした差別発言は、山間部に住む若い障害の声であった
国際会議で「持続可能性」を議論したとき、私に噛みついてきた人達
ドイツ社会学の「環境=Umwelt」の解釈 生きられる場
苦しみを共にするものは、共に生きられる=仏典の言葉（原典は不明）

- 最後に、皆さんへ

- ・とにかく、早く外（外国）に出てみて下さい。
世界には借りた金を返してはいけない国もある。——世界は多様性に満ちている。
- ・出汁に使われた水俣病、それでいいんです。 ミナマタの世界的な現代的な意味
- ・原田先生と東アフリカ・ムワンザのホテルで語った夢